
その腹黒さも一面である

縁側の猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その腹黒さも一面である

【Nコード】

N0315Z

【作者名】

縁側の猫

【あらすじ】

何時ものように駅の階段を下りているとき

誰かに押されて転倒した。

意識は消え、起きた時には異世界風日本だった。

名前の同じ別人の体始まった新しい生活。

これからどう生きるか悩みも先送りして今に行く。

強くてニューゲーム風人生を楽しめるのかそれとも

プロローグの下準備

その日は少し足を延ばして、隣町に出来た大型書店に来ていた。ふと手に取った新刊のあらすじを読んでいたら面白かったのだが、シリーズもので前巻までの話を読んでいなかった為の買出しだ。

近所の中型書店には置いていなかった。

最近はやほどの人気シリーズじゃないとシリーズ通しては陳列していない。

もちろん注文をすれば来週には入荷するんだが、一週間も待てないというのは読書中毒だからだろうと自分でも苦笑してしまう。

そんなわけで目的の小説を探しに行き、ついでに新しい本を見るという充実した時間を過ごした。

早く帰って読みたいと急いで帰ったのだが、

駅のホームを出て駐輪場へ預けた自転車を受け取りに行こうと階段を下りた時だ。

トンつと背中を押す力が加わった。

普通なら少しバランスを崩すだけだったかもしれない、

しかしながら浮足立って気分の急いていた自分にはそのまま転倒するのに十分な力だった。

あっと思いつきに？まろうとして出した手も空を掻いてそのまま階段を転げ落ちた。

階段に体中を打ちつけながら痛みを感じ、そして意識が途切れた。

プロローグ

目が覚めた室内は自分の知らない所だった。

布団に寝かされていた様で、起きようとしたら激痛が走った。

打ち所が悪かったのか、力を入れると酷く痛む。

痛みが耐えがたかったのでそのまま寝ておく事にした。

どこだここは？

改めて視線を走らせた室内は病院という感じではなかった。

照明も無く床板に敷かれた布団で寝ているのだ。

病院に担ぎ込まれたのなら最低でもベットに寝かされているはずなのだが

洋式の雰囲気は無く古い日本家屋を思わせる佇まいだ。

なにがどうなっているのかと考えている所に人が入ってきた。

「気が付いたのかい？」

そう声を掛けたのは老女であった。

老女というと失礼になるのかもしれない、白髪を束ねた髪はほつれもなく上品な顔立ちをしている。

祖母にこういった人がいれば、お婆さまと丁寧に呼んでしまいそうだ。

再度身を起こそうとしたがやはり身体が痛む。

苦痛に歪んだこちらの顔を見て、老女はまだ寝ていなさいと言ってくれた。

「ご迷惑をお掛けしましたが、ここは・・・どの病院になりますか

？」

「病院？ いえここは私のお家ですよ」

「貴方のご自宅ですか？ 何故私はここに居るのでしょうか？」

病院には運ばれなかったと？ 意識不明で倒れている人間を自宅に運ぶという可能性が有るものなのか。

「あなたは小川の近くで倒れていたそうよ、あの人が狩の途中で見つけて運んできたの。覚えて居ないの？」

逆に問いかけられたが・・・小川の近くとは何処のことだろう。倒れたのは駅の階段のはずだが

「いえ・・・最後に意識を失ったのは駅の階段のはずですが」

再度意識が途絶える前の事を思い出してみたが確かに階段から転げ落ちた筈だ。

「駅の階段？ ですか、この辺りには階段のある建物は無いはずですが」

「とにかく怪我が良くなるまでちゃんと養生しなくてはいけないわ」

そう言って布団を掛けてくれた。

言われる通り確かにこうも身体が痛むと起き上がるのも辛い。

「ご迷惑をおかけします・・・」

「気にしないで、こんな山奥に住んでいるとねお客様なんて滅多に
来ないですし。それに・・・若い人が居てくると息子がいた頃を思
い出して嬉しいのよ」

それから暫く話をして、少し疲れたので休ませてもらった。

少し出てくると言って部屋を老女が部屋を出るのを確認してから、
一息ついた。

話した感じや表情などから人柄は良さそうと印象を受けたが状況が
状況なので警戒心は消えない。

寝たまま話した内容を検討した。

彼女の名前はヨネさん、旦那さんと二人で暮らしているらしい。

人里から離れて森の中に暮らしているらしく、一人息子も何年も前
に家を出たのだそうだ。

老後を田舎で暮らすというのは聞かない話ではないが、

人里からも離れてさらに山奥に住んでいるというのは違和感を覚え
る。

それにこの部屋、日本家屋にこだわっているのかと思ったが証明は
おろか日用品からも現代文化を思わせるものがないのだ。

まるで文明開化以前の生活を再現しているようなそんな趣だ。

窓にもガラスを使っておらず木板を棒で支えて開けてあるのが見え
る。

外界との接触を経て原始的生活をしているんじゃないかと思える。
何にしても、訳ありなのかもしれない。

それよりなにより、何故自分がここにいるのかが一番の問題だが。

駅付近で気を失っていたのなら人の通りも多いのだから病院に運ば
れるのが普通だろう。

それが山奥に転がっていたというのは、誰かが運んだとしか考えら

れない。

その誰かがヨネ達夫婦なのかもしれないし別の誰かなのかもしれない。

判断材料がない。

しかし、駅のホームで偶然気を失っていた人間を目撃者を残して連れ去るなんて事があるのだろうか？

もしくは病院で横になっているのを連れ去る？

どちらも難しいと思う。

日本の警察は優秀なので目撃者が一人でもあればそこから追われる可能性はあるだろう。

そして自分を攫ったとして何が得になるのか、

貧乏学生と言って差し支えない自分をさう理由は・・・あまりないな。

怨恨の線も・・・人付き合いの少ない自分に攫ってまでというのは考えにくい。

いくつか思考してみるが現実的な答えが出ない。

動けない身では観察ぐらいしか出来ないが、疲れた・・・。

考えすぎての疲労なのか、いつの間に眠っていたようだ。

起きた時には部屋暗く隣の部屋の光源が扉と壁の隙間から少し漏れてきていた。

何時間経ったのか。

腕時計を見ようとして腕を上げて気がついた。

最初に起きた時にあった痛みが今は無い事に。

軽い打ち身だったのだろうかとかと起き上がったが、全身に痛みは無い。

布団から出て明りの漏れる扉の方へ言ってみる。

扉を開けるといい匂いがした。

「あら起きて大丈夫なの？」

ヨネさんは部屋の中央に作られた庵で鍋の面倒を見ながら声を掛けてきた。

「痛みも引いたので大丈夫だと思います」

居間といった風情のこの部屋を見てもやはり文明の匂いを排除するようだ。

「もうご飯が出来るからそこに座って、お腹も空いているでしょう？」

そういつて鍋の周りに一つを指した。

鍋の横にはもう一人老人が座っていた。

話に聞いていたヨネの旦那に当たるタツミだろう。

促された通り座ったあとタツミに話しかける。

「タツミ・・・さんですよ、助けて頂いてありがとうございます御座います」

「ああ、気にしなさんな。あそこであのまま倒れられて居ても獣に人肉の味を覚えられて困っただろうしな。しかし・・・なんだったあんな所で倒れてたんだ。見た所狩人が迷い込んだってわけでもなさそうだし」

問われた疑問の声には演技のような所は無いが、何所まで本当なんだろうか。

「それが自分でも解らないのですが、覚えているのは街中で階段を下りている時に派手に転びましてそこで気を失った筈なんです」

「それがあの小川の近くにいたってのか・・・、神隠しにでも会ったのかね。不思議な事があるもんだ」

くううとそこで腹の音が鳴った。

確か朝食しか食べていなかったので相当空腹だったのだろうか・・・、羞恥から顔が赤くなるのが自分でも解る。

「はっはっはっ！！一日中寝てたんだ腹も減るわな、兎に角飯だ飯」

「はいはい」

ヨネさんが鍋をよそって渡してくれる。

いいにおいだ・・・。

とりあえず食べる事にした。

「・・・とても美味しいです」

野菜と何かの肉を煮たそれは薄味だったが胃に染みた。

お椀に入れられた分を食べて、少し空腹も落ちついたようだ。

「傷も大丈夫なようだな、さすが鬼の血を引いてるだけのことはあるな」

「鬼の血？」

「違うのか？その赤い目は、鬼の血を引いてる名残だと思ったんだ

が？」

「鬼だなんて・・・迷信じゃないですか、からかわないで下さいよ」
そう言うのと老夫婦は一度顔を見合わせて眉をひそめたが、可笑しな事なんて言っていないはずだ。

「鬼が迷信なんてお前さんこそ何言ってるんだい。こんな世の中だからご先祖様を恨んでるのかもしれないがそれでも迷信なんて言うのはあんまりってmondaze」

「ご先祖も何も、居もしないんですから」

そう返答すると更に困った顔をされた。

「その赤い目もその耳も血を受け継いだ証拠なんですから、そんな悲しい事を言わないで下さいな」

「赤い・・・目？」

悲しそうにヨネに言われて、からかっている雰囲気ではなさそうだが。

じっと見られている、疲れすぎ血走っているという表現ではないだろう。

「鏡は・・・ありますか？」

そう尋ねるとヨネが奥のタンスから何かを取ってきた。
何かの金属を磨いたそれは少し鈍いが自分の姿をちゃんと写し取ってくれた。

そこにいつもの見慣れた自分の顔が在った。

ただし、言われた通り目は赤くそして耳が長くとかっていた。

良く見ると八重歯は少し長くなっていたが、それはちよつと嬉しかった。

いっでの事情(1)

「ここに置いてください!!!」と言いそれが受け入れられてから三ヶ月が経った。

今は鍬をもって荒れ地を畑にするべく耕してる。

あの日決めた事は生きると言う事。

状況はいまだ不透明だが、衣食住を確保しない事にはすぐ野たれ死ぬ。

サバイバル技術なんてものは当然ない現代人だし、金銭の手持ちも無いから何をするにも元手が無い。

そこでまずは、家に置いてもらいなんとか情報を集めて一人立ちまでの時間を過ごそうと言うわけだ。

二人も息子が出て行って寂しかったようで、喜んで引き受けてくれた。

三ヶ月を過ぎた時点で解った事だが、まず自分の事。

変わったのは目や耳だけでなく、身体能力も上がったようだ。

とにかく力が出るようになった。

一言でいうとリングが握力で潰れる程度には筋力が上がったようだ。脚力も以前の自分に比べれば高いと思うが、まだ慣れないからもてあまし気味。

次にここでの風土などの一般常識だが基本は日本と変わらなさそうだ。

山で採れる食糧などは見た事が在るものがおおい、食べた事がないような山菜も食卓に並ぶが単に知らなかっただけだろう。

地理に関しては詳しく解らないのだが、会話が日本語で通じている事や漢字などが使われているらしいことから何かしら日本に関連し

た世界らしい。

文字に関しては二人とも読み書きが出来なかったようだが、書いて見せたものには見覚えがあったようなのでおそらくといった予想の域をでないが。

ここが並行世界論なのか、依然にも同様に日本人が来た事があり文化を浸透させたのか

諸説を自分で組み立てたが決定打には情報不足だった。

文明のレベルに関しては見る限り江戸時代よりも前なんじゃないかと思う。

鍬や鍋など鉄の品は確認しているし税を納めるシステムもあるようだが、

このあたりでは通貨などは流通が少なく物々交換が主流との事だ。自給自足をしているので得にいらないうな。

そんな情報を得ながら、一宿一飯の恩を返すべく働こうとしたわけだが案外役に立てた。

筋力が高い為力仕事がメインなのだが新しく畑を開拓したり、薪用の木を切りだしたりなどだが。

そうして生きる準備を進めつつ三ヶ月は経ったわけだ。

生きるだけなら自給自足できるこの状況を持続すればいいだけなのだが、

やりたい事が一つだけあった。

ここの技術レベルだけでは難しいかも知れないが

何よりかなりの財力が無ければ出来ないだろう。

とりあえずの目を付けている事はあるが、

畑もひと段落したのでそろそろ行動に移る頃合なのかもしれない。

ここでの事情(2)

物を売るために山道を辿って町まで降りてきた。

近隣には村も当然あるのだが

自給自足を基本としている村では取引として足りない物がある為の遠出だ。

町となっているだけあって結構な賑わいなのだが路面はアスファルトというわけも無く

建物も平屋建てが精々のようだ。

「それでは、行って来ます。待ち合わせは先ほどの茶屋で」

そう言ってタツミさんと別れた。

少し心配そうな顔をしていたが、割と個人的な活動になるので付き合わせるのは少し悪い。

なによりタツミさんにはタツミさんの用事がある事だしな。

事前に聞いていた通り町の西側にある建物を訪ねた。

ここでの役所のようだ。やくしよではなくやくどころと読むらしいが多少昔風味なんだろうな。

入り口は立派な門があり門番だろうか、二人ほど脇に立っている。

「なにか用向きか？」

片方が問いかけてくる。

「ええ、開墾に関する申請をここですると聞いて来たので」

「入って右手の建物の中に居る者に詳しいことは訊ねろ」

怪しいから追い返すという方針ではないようだ・・・、結構開放的なのか。

わりとあっさりと通されて、言われた建物を探す。

道としては町よりも整備されており建物も直ぐに在ったので、迷うこともなかった。

室内は窓を大きめに取っているのかわりと明るかった。

玄関口には一人机に座った人が居て、こちらに気づいて声を掛けてきた。

「村の開拓に関しての届け出はこちらで行うと聞いて来たのですが？」

「新しく農地を広げるんですか？」

「いえ、廃村になっている村の再興とそれに伴う農地の登録です」

目的の一つは老夫婦の住んでいる山小屋から峰を一つ越えた所にある廃村を立て直す事である。

土地の所有等は基本国が管理するのだが開拓した分はその人間の所有物とされ、家屋の数や農地の広さに応じて税を取られるらしい。山に関しては農耕は出来ないが狩猟が出来るため個人で所有している者も居るようだが手入れや税の割合も高い為ほぼ未開拓で国所有なようだ。

なんらかの理由で税が払えない場合は土地を没収されるなどもあり、見つけた廃村も人が居なくなり保てなくなったとの事だ。

基本の手続きをしたが、こちらが文字を書けると言う話をしたらかなり驚かれた。

やはり文字の普及率は低いようだ。

廃村を再度立て直すという事でかなり変な顔をされたが、とりあえず地盤が必要だ。

何をやるにも資本が無ければ動けないしな。

誰かの下で働くのいいが、せっかくの状況なので好き勝手やってみるのもいいと思ったのだ。

役所の手続きは思ったほど時間がかからなかった為街を歩いて時間をつぶす事にした。

「確かに現代日本じゃあ無いな・・・」

町並みも木造建築の一階建てばかりで屋根も瓦を使っているものが見受けられない。

なにより時折尻尾を生やした人間を見かけるのだからファンタジーと言いたいようがないだろう。

しかし・・・、文明レベルがかなり退行しているならある程度の現代知識を使えばある程度商売にしても何にしても優位性を保って行えるんだろうか。

いろいろ今後の参考にしようと思いつつ表通りから裏通りに入ってみるが町の中心から離れるほど建物もみすぼらしくなって行くようだ。

貧富の差はやはりあるようだが、町の端まで来るとかなり貧民街といった感じを受ける。

使える部分もあるだろうなと頷いて町に戻る事にしたが

「あんた余所もんだろ、こんなところに来るなんてな。有り金全部置いてって貰おうか」

治安の悪い所まで来てしまったようだ・・・三人ほどの汚れた男達が囲むようにそう話しかける。

「面倒だから身ぐるみとっとはいじまおうぜ」

そういつて右手を掴みかかられる。

「・・・さわるなよ」

掴まれた右腕を力を込めて引くとあっさり手を掴んでいた男を引き倒した。

やはり腕力は人より高いらしい。

「やろうってのかこのやろう」

残りの二人が掴みかかろうと迫ってくるがその前に距離を開ける。帰り打ちにしたい所だが殴り合いなどした事がないのだからあまり近接したくは無い。

かといって得物を持っているわけでも無いのでどうしたものか。

「まちやがれ！！」

引き倒していた男も起き上がってこちら向かってくるようだ。

まあ、逃げるかと判断して背を向けて走り出す。

脚力にも差があるようでどんどんと距離を引き離れた。

相手が見えなくなるほど走りきってから一息をついたが、

思ったほど息が上がっていない、体力が上がっていると言う事だが・
・平均と比べてどのぐらいか知る機会があるといいんだが。

体力と筋力が一般平均よりも明らかに高ければそれだけで荒事にも優位に立てる筈だが、ファンタジーであればこれぐらいの能力は良くいるのかもしれないので油断は禁物だる。

まして荒事の経験なんてほぼないのだから経験を積んだような相手では分が悪いように思う。

なにか対応策を考えておいた方が良いのかもしれないな。

いろいろあったため時間がかなり過ぎたようなので急いで待ち合わせの場所へ向かった。

「すみません、お待たせしました」

茶屋で待っていてくれたタツミさんを見つけそう声を掛けた。

「いや、そんなに待ってないよ。それでどうだった？」

「ええ、特に問題もなく手続きが出来ましたよ」

「そうかいそうかい、おまえさんはやっぱり相当学があるんだな。山向ここの村長だって手続きには毎回苦労するって言ってたもんだが」

「そんなに大した事は無いはずなんですが、やはり文字の読み書きというのは出来ないのが普通なんですか？」

「簡単なものなら読める事は読めるんだが、書くとなるとなかなか難しいな。お偉いお役人さんか商人さんとか取りまとめしてる村長さんぐらいだろう」

わしらは畑を耕すか狩りをするかで困らんしのと朗らかに笑顔を見せられた。

「それじゃあ戻りましょうか」

一応のやる事を終えたので帰路に就いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0315z/>

その腹黒さも一面である

2012年1月8日08時50分発行